佐久市埋蔵文化財調査報告書　第182集

馬瀬口遺跡

MASEGUCHI

長野県佐久市瀬戸

馬瀬口遺跡発掘調査報告書

2010.3

長　野　県　佐　久　市

長野県佐久市教育委員会

例　言

1　本書は、平成19年に調査した長野県佐久市新子田・瀬戸に所在する馬瀬口遺跡の調査報告書である。

遺跡名	馬瀬口遺跡　略称ＳＭＭ
所在地	長野県佐久市瀬戸86-1、316-1、340他
調査面積	900㎡
開発主体者	長野県佐久市建設部土木課
開発事業名	市道改良工事
調査期間	平成19年７月24日～平成22年３月29日

2　本調査は、佐久市の委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。

3　調査は、羽毛田卓也を担当者とし、地元の皆様をはじめ多数の方の協力を得て実施した。

4　本遺跡に関わるすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

5　本書の執筆・編集は、羽毛田卓也が担当した。

凡　例

1　遺跡の略称　　ＳＭＭ

2　遺構の略称　　住居址 → Ｈ

　　溝状遺構→ Ｍ

3　遺構・遺物の縮尺は各図中にスケールを付したので参照されたい。

4　本文・表・図版等の番号（例７－３）は挿図番号（例第７図３番）と対応する。

5　ピット付近の（－）数値は、確認面から底面までの深度を表す。

6　遺構横断図中の記号「Ｓ」は「石」を表す。

7　土層説明中の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・㈶日本色彩研究所色票監修1987年度版『新版標準土色帖』の表示に基づいた。

8　写真図版中の遺物の縮尺はその都度明記し、明記のないものは任意の縮尺である。

9　土層説明中の粒子表記は国際標準である「堆積物粒径分類」に基づいた。

名称	礫・パミス				砂			泥	
	巨礫	大礫	中礫	細礫	粗砂	中砂	細砂	シルト	粘土
直径（㎜）	256以上	256～64	64～４	４～２	２～0.5	0.5～0.25	0.25～62/1000	62/1000～4/1000	4/1000以下

目　次

例言・凡例
目次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯……1
1　調査に至る動機……1
2　調査の概要……3
3　調査の体制……3
4　調査日誌……3

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……4
1　遺跡の自然的環境……4
2　遺跡の歴史的環境……4

第Ⅲ章　調査の記録……5
1　層序……5
2　第１号竪穴住居址……5
3　第２号竪穴住居址……6
4　第３号竪穴住居址……7
5　第４号竪穴住居址……8
6　第５号竪穴住居址……11
7　第６号竪穴住居址……13
8　第７号竪穴住居址……15
9　第８号竪穴住居址……17
10　第１号溝状遺構……18
11　第２号・第３号・第４号溝状遺構……19
12　第５号溝状遺構……20

写真図版……21

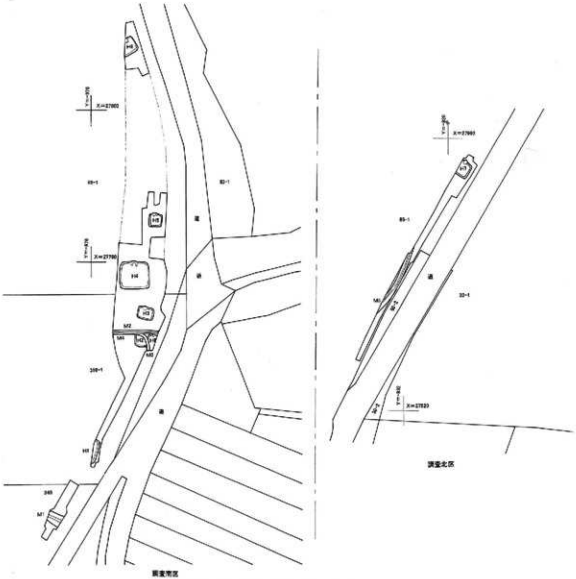
第Ⅰ章　発掘調査の経緯

1　調査に至る動機

馬瀬口遺跡は、佐久市のほぼ中央、新子田・瀬戸に所在し、旧湯川と志賀川により形成された帯状の微高地上（標高668m～670m）に展開する古墳時代から平安時代の集落址である。今回の調査地点は、本遺跡中央部に位置する。

今回、佐久市土木課が行う道路改良工事（S33－191号線）に伴い、佐久市土木課と佐久市教育委員会とで協議の結果、試掘調査を行い、遺構の有無を調査した。試掘調査の結果、古墳時代以降と考えられる遺構が検出されたため、再度協議を行った。協議により、遺構が検出された部分について、土木課より依頼を受けた佐久市教育委員会が主体となって発掘調査を行う運びとなった。

第１図　馬瀬口遺跡位置図（1：50,000）



第２図　調査区全体図・地籍図（1：1,000）

2　調査の概要

発掘調査

調査面積	900㎡	
調査期間	平成19年７月24日から平成20年３月28日	
調査遺構	古墳時代の住居址	４軒
	奈良・平安時代の住居址	４軒
	古墳時代以降の溝状遺構	５条

3　調査の体制

事務局	佐久市教育委員会 社会教育部 文化財課
教育長	土屋盛夫
社会教育部長	工藤秀康
文化財課長	森角吉晴
文化財調査係長	三石宗一
文化財調査係	林幸彦、並木節子、須藤隆司、小林眞寿、羽毛田卓也 冨沢一明、神津格（～９月）、上原学、井出泰章（10月～） 出澤力

4　調査日誌

平成19年７月24日～８月２日
　　重機による表土剥ぎ開始
　　発掘器材の搬入
平成19年７月24日～９月２日
　　測量基準杭の設置
　　遺構検出作業、遺構の掘り下げ、遺構の実測・写真撮影
平成19年９月２日
　　全調査区の調査終了
平成19年８月３日～平成20年３月28日・平成21年12月８日～平成22年３月29日
　　遺物の洗浄・注記・復元・実測・写真撮影
　　遺構実測図面の修正・遺構第２原図作成
　　各種図面のトレス、報告書版下作成
　　報告書編集作業、校正
　　遺物・図面の整理・収納

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の自然的環境

佐久平は、北方に前掛山（2524m）・黒斑山（2404m）・高峰山（2106m）・湯ノ丸山（2101m）・火山活動中の浅間山（2568m）を主とする三国山脈の南端峰群、東から南方に関東山地から連なる山々である平尾山（1155m）・森泉山（1136m）・八風山（1315m）・寄石山（1334m）・物見山（1375m）・凧の峰（1292m）・熊倉峰（1234m）・荒船山（1422m）・兜岩山（1368m）・霊仙峰（1268m）などからなる関東山地北西部の佐久山地北方峰群、西から南方に蓼科山（2530m）・双子山（2223m）・横岳（2480m）・茶臼山（2384m）を主とする北八ヶ岳連峰と、ほぼ四方を山々に囲まれた盆地で、長野県の中央東端に位置し、群馬県と接している。佐久平全域の平坦部の標高は約600mから1000mを測り、佐久市はこの佐久平のほぼ中央に位置し、平坦部の標高は620mから770mを測る。佐久市は北側で北佐久郡軽井沢町・御代田町、小諸市、東御市と、西側で北佐久郡立科町と、南側で茅野市、南佐久群佐久穂町と、東側で群馬県甘楽郡下仁田町・南牧村と接している。平成14年度の年平均気温は10.9℃、年間降水量は994㎜、年間日照時間は2069.9時間、最高最低気温差は46.4℃で、典型的な中央高地型気候となっている。

佐久市は中央部を佐久地方南端の甲武信ヶ岳に源を発する千曲川が北進し、浅間山麓に源を発する湯川・濁り川、佐久山地に源を発する霞川・香坂川・志賀川・滑津川・田子川・瀬早川・八重久保川・雨川・谷川、北八ヶ岳山麓に源を発する石突川・片貝川・大沢川・中沢川・小宮山川・倉沢川・宮川・滝川・大曲川・布施川・須釜川・八丁地川・鹿曲川・細小路川などの小河川がそれに向かって集まり、大小の扇状地や河岸段丘・侵食谷を形成している。

今回調査した馬瀬口遺跡は、浅間山に源を発している湯川が、一万二千年前の浅間山の噴火に伴い流路を変換させた際に形成されたと推定されている帯状低地と東部寄石山に源を発する志賀川に挟まれた緩やかに南に傾斜する帯状台地上に展開する。

2　遺跡の歴史的環境

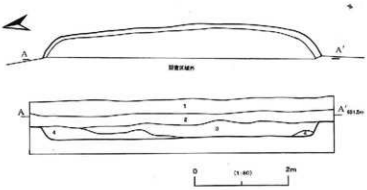
今回調査した馬瀬口遺跡の所在する瀬戸・新子田地区には、弥生時代から中世にかけての遺跡が展開している。本遺跡の含まれる台地上では南側に深堀遺跡群が、帯状低地を挟んで東側には和田上遺跡群、北側には野馬窪遺跡群、西側には番屋前遺跡群が展開している。番屋前遺跡群は何回かの調査により中世の集落が検出され、他の遺跡群はいずれも弥生時代～平安時代の複合遺跡である。また野馬窪遺跡群は昨年の調査により中世の集落が検出された。古墳は、東側に和田上古墳、北側に野馬窪古墳が存在する。北西部で近接する東内池遺跡・高師町遺跡群でも中世の集落が検出されており、中世の集落遺跡が大きく展開する地域であることが明らかになりつつある。今回の調査では、中世と断定されるような遺構は検出されていないが、溝状遺構が中世に該当する可能性もある。

第Ⅲ章　調査の記録

1　層序

遺構確認面までの土層は、２層を確認した。第１層はしまりのない黒褐色耕作土で、第２層は耕作の影響下で成立したと推定されるしまりのなく、ローム粒子を含む黒褐色土である。遺構検出面である地山は、浅間軽石流Ｐ１及びその二次堆積層である。（第３図参照）

2　第１号竪穴住居址（Ｈ１号）



第１層　しまりの弱い黒褐色耕作土。10YR2/3
第２層　しまりの強い褐色土。ローム含む。10YR3/2
第３層　暗褐色土。ロームブロック状に少量含む。10YR3/3
第４層　暗褐色土。ロームブロック状に多量含む。10YR3/4

第３図 第１号住居址実測図

第４図 第１号・第２号住居址出土遺物実測図（１：４）

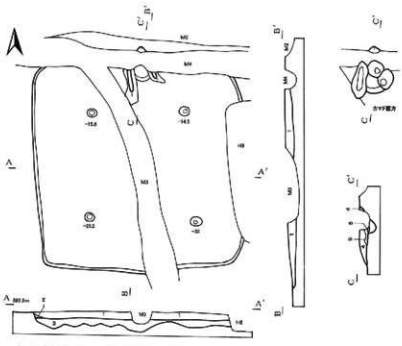
第１号竪穴住居址は調査南区の南端で検出された。平面形態は方形と考えられるが、大半が調査区域外であり断定はできない。検出された南北長は592cm・東西長73cmで、壁の高さは30cm内外を測る。床面は著しく硬化しており、貼床は確認されなかった。覆土は２層に分割された。図中第１層と第２層は全体層序として説明をくわえた。第3層はロームをブロック状に少量含む暗褐色土で、第４層はロームをブロック状に多量含む暗褐色土である。

ピットおよびカマドは、検出できなかった。

遺物は、甕、小型甕、坏、勾玉などが出土した。そのうち小型甕（第４図-１）と勾玉（４-２）のみ図示した。１の小形甕はほぼ完形で最大部を胴中央に持つ。胴部内面にヘラナデが施され、口縁部はヨコナデである。外面はヘラケズリが施される。２の勾玉は穿孔部付近を欠損する。石質は滑石である。

本住居址の所産期は奈良時代8世紀後半と推定される。

3　第２号竪穴住居址（Ｈ２号）



第５図　第２号住居址実測図

第２号住居址は、調査南区中央で検出された。西側を第8号住居址に、北側と中央南北を第２・３・４号溝状遺構より破壊される。検出された東西長は450cm、南北長は440cm、深さは６～22cmを測る。覆土は３層に分割された。第１層はロームと炭化材微小片を微量含む黒褐色土、第２層はロームを多量含む暗褐色土、第３層は貼り床で、ロームの小ブロックを含む褐色土である。

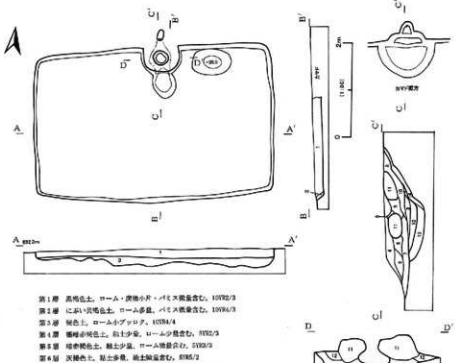
ピットは主柱穴と考えられるものが4基確認された。カマドは残存状況が悪いものの北壁中央部で

確認された。粘土を主体として構築されていたものと推定される。カマドの覆土は4層が確認された。第４層は粘土粒子を多量、焼土粒子・ロームを微量含む黒褐色土、第5層は焼土を多量、粘土粒子を微量含む暗赤褐色土、第６層は焼土を主体とし、ロームを微量含む暗赤褐色土、第7層はカマド構築層で、ロームブロックを多量に含む褐色土であった。

遺物は甕、坏などが出土し、坏を図示（第４図、第７図）した。4-3・4、7-1・2の坏ともに、体部から口縁にかけて内外面ともにヨコナデ成形で、底部外面にヘラケズリが施される。4-3・4の内面底部は放射状のヘラミガキが施される。7-1の底部外面はヘラケズリ後にヘラミガキが散見され、7-1・2の底部内面はヘラナデである

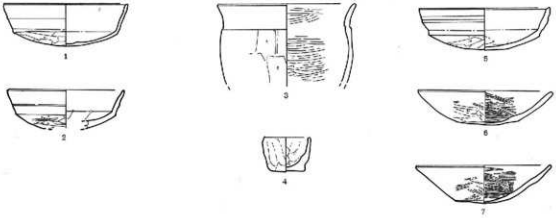
本住居址の所産期は、古墳時代６世紀後半と推定される。

4　第３号竪穴住居址（H３号）



第６図 第３号住居址実測図（１：80、カマド断面図のみ１：40）

第３号住居址は、調査南区中央で検出された。検出された東西長は512cm、南北長は331cm、深さは16～24cmを測り、東西に長い方形を呈する。覆土は３層に分割された。第1層はロームと炭化材微小片、パミスを微量含む黒褐色土、第２層はロームを多量、パミスを微量含むにぶい黄褐色土、第３層



第７図　第２号・第３号住居址出土遺物実測図

は貼り床で、ロームの小ブロック主体の褐色土である。

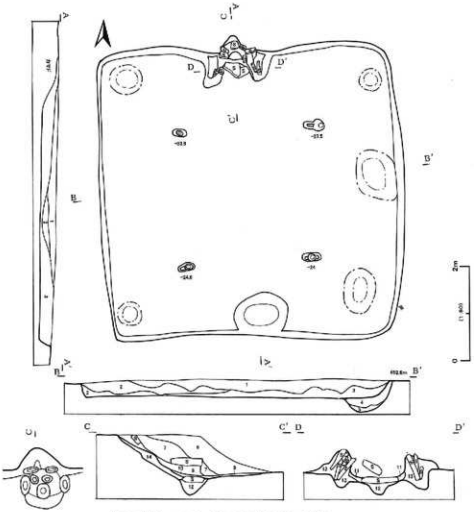
ピットは貯蔵穴と考えられるものがカマド右脇で確認された。カマドはほぼ完全な形で、北壁中央部で確認された。粘土を主体として構築されていた。焚口周囲・かけ穴周囲の構築粘土層は、使用時の熱を受けて硬化し赤黒色していた。カマドの覆土は11層が確認された。第４層は粘土粒子・ロームを少量含む極暗赤褐色土、第５層は粘土を少量、ロームを微量含む暗赤褐色土、第６層は粘土を多量、焼土粒子を微量含む灰褐色土、第７層は焼土を多量、粘土・ロームを微量含む黒褐色土、第８層は粘土を多量、焼土粒子・ロームを微量含む極暗赤褐色土、第９層は灰・焼土主体でロームを微量含む褐灰色土、第10層は焼土主体で灰を微量含む明赤褐色土、第11層はカマド構築層で粘土主体のにぶい黄褐色土、第12層は構築層で粘土ブロック主体の褐色～黄褐色土、第13層は構築層で粘土・ロームブロックを少量含む暗褐色土、第14層は粘土を多量含む黒褐色～褐灰色土であった。

遺物は甕、坏、手捏ねなどが出土した。坏を図示した。３は小型甕で外面がヘラケズリ、内面がハケ目調整されていた。4は手捏ねで、内外面ともにヘラ先と指により成形されていた。５の坏は体部がヨコナデ、底部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデで、６・７の坏は、外面がヘラケズリ後にヘラミガキ、内面はヘラミガキが施されていた。

本住居址の所産期は、古墳時代６世紀後半から７世紀初頭と推定される。

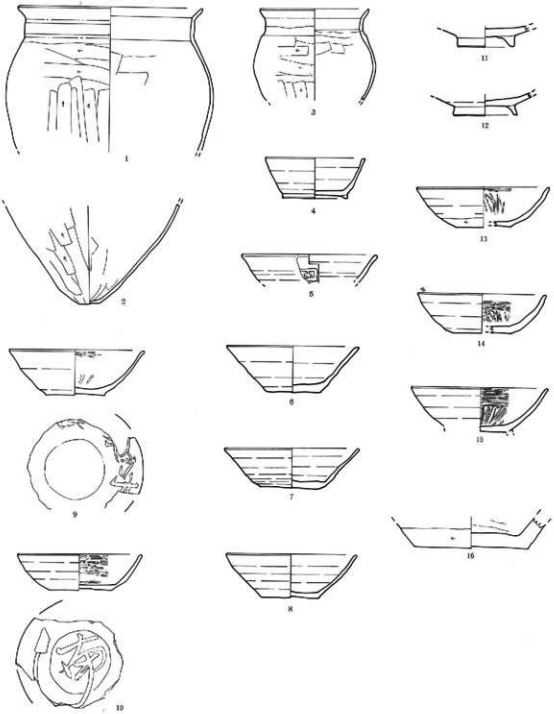
5　第４号竪穴住居址（Ｈ４号）

第４号住居址は、調査南区中央で検出された。検出された東西長は698cm、南北長は631cm、深さは28～38cmを測る。覆土は5層に分割された。第1層はロームを少量と炭化材微小片、パミスを微量含む暗褐色土、第2層はロームを多量、パミス・炭化材微小片を微量含む褐色土、第3層はロームブロックを多量含み、パミス・炭化材微小片を微量含む褐色土、第4層は貼り床で、ローム主体の明黄褐色土、第５層は貼り床で、ロームを少量、パミス・炭化材微小片を微量含む黒褐色土である。東壁と西壁際を中心に貼り床が認められたが、北側・南側・中央部においては、明瞭な貼り床は認めることができなかった。



第８図　第４号住居址実測図（１：80、カマド断面図のみ１：40）

ピットは主柱穴と考えられるものを４基確認した。この期には珍しい楕円系のピットであった。また床下より５基のピット（土坑）が検出された。カマドは崩壊した状態で、北壁中央部で確認された。粘土と溶結凝灰岩を主体として構築されていた。カマドの覆土は９層が確認された。図中第６層は粘土粒子・焼土粒子・ロームを微量含む黒褐色土、第７層は粘土粒子・焼土粒子を多量含む明赤褐色土、第８層は粘土を多量、焼土粒子を少量含む黄灰色土、第９層は焼土主体のにぶい赤褐色土、第10層は焼土のにぶい赤褐色土、第11層は構築層で、粘土主体の褐色土、第12層は構築層でローム主体の褐色土、第13層は構築層で粘土主体の灰褐色土、第14層は構築層で粘土主体の明赤褐色土であった。



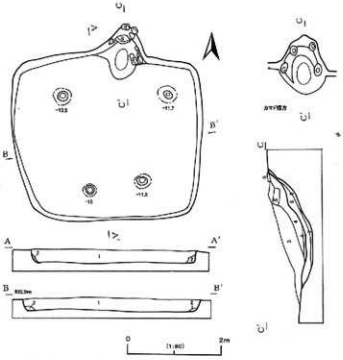
第９図　第４号住居址出土遺物実測図（１：４）

遺物は甕、坏、などが出土した。１・２は土師器の甕で外面がヘラケズリ、内面にヘラナデが施される。１の甕は頸部がコの字を呈する。３は小型甕で外面がヘラケズリ、内面にヘラナデが施され、頸部がコの字を呈する。４・５・６・７・８は須恵器の坏でロクロ成形である。６・７・８は底部が回転糸切りで、４は糸切り後にヘラケズリで調整され、高台が付されている。５は墨書土器で「田」と推定される。９～15は土師器の坏で、いずれもロクロ成形後、内面はヘラミガキが施される。９は墨書土器で、「金」「木」の字が読み取れる。10は墨書土器で「南」と推定され、内面に黒色処理がなされる。11・12・15は底部糸切り・ヘラ調整後に高台が付される。11・13・14・15は内面に黒色処理

がなされる。16は須恵器の甕の底部である。

本住居址の所産期は、平安時代９世紀前半と推定される。

6　第５号竪穴住居址（Ｈ５号）



第1層　黒褐色土。ローム少量、パミス・炭焼小片を微量含む。10YR2/3
第2層　褐色土。ローム多量、パミス・炭焼小片を微量含む。10YR4/4
第3層　暗褐色土。粘土少量、ローム・パミス微量含む。10YR3/3
第4層　にぶい黄褐色土。粘土・粘土多量含む。10YR4/3
第5層　暗赤褐色土。粘土主体。5YR3/6
第6層　灰黄褐色土。粘土ブロック・ローム少量含む。10YR4/2
第7層　褐色土。ローム主体7.5YR4/6
第8層　褐灰色土。粘土主体。7.5YR4/1

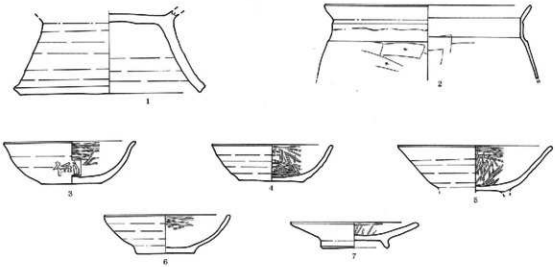
第10図　第５号住居址実測図（１：80、カマド土層断面図のみ１：40）

第５号住居址は、調査南区中央で検出された。検出された東西長は405cm、南北長は356cm、深さは26～33cmを測る。覆土は2層に分割された。第1層はロームを少量と炭化材微小片、パミスを微量含む黒褐色土、第2層はロームを多量、パミス・炭化材微小片を微量含む褐色土である。貼り床は認められなかった。

ピットは主柱穴と考えられるものを４基確認した。またピットの掘り方を確認した。カマドは崩壊した状態で、北壁中央部で確認された。粘土と溶結凝灰岩を主体として構築されていたものと推定される。カマドの覆土は６層が確認された。図中第３層は粘土粒子を少量、パミス・ロームを微量含む暗褐色土、第４層は粘土粒子・焼土粒子を多量含むにぶい黄褐色土、第５層は焼土主体の明赤褐色土、第６層は構築層で、粘土ブロック・ロームを少量含む灰黄褐色土、第７層は構築層で、ローム主体の褐色土、第８層は構築層で、粘土主体の褐灰色土であった。

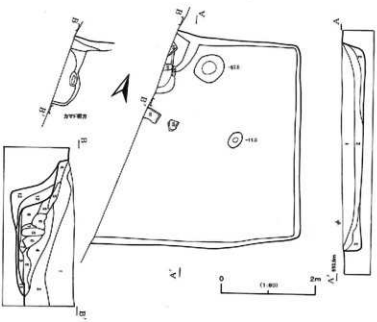
遺物は甕、坏、高盤などが出土した。１は須恵器の高盤で台部のみである。全体をロクロ成形される。やや焼成不良で、全体が褐色化している。２は土師器の甕で、外面がヘラケズリ、内面にヘラナデが施される。頸部が明瞭なコの字を呈する。３～７は土師器の坏で、ロクロ成形後、内面にヘラミガキが施される。底部が回転糸切りで、５・７は糸切り後にヘラケズリで調整され、高台が付されているが、５は高台部が欠損する。３は墨書土器で「何」と推定される。３・４・７は内面に黒色処理がなされる。７は皿型の坏で、灰釉陶器の模倣と捉えた場合遺物全体の年代を押し下げる。

本住居址の所産期は、平安時代９世紀から10世紀と推定される。



第11図　第５号住居址出土遺物実測図（１：４）

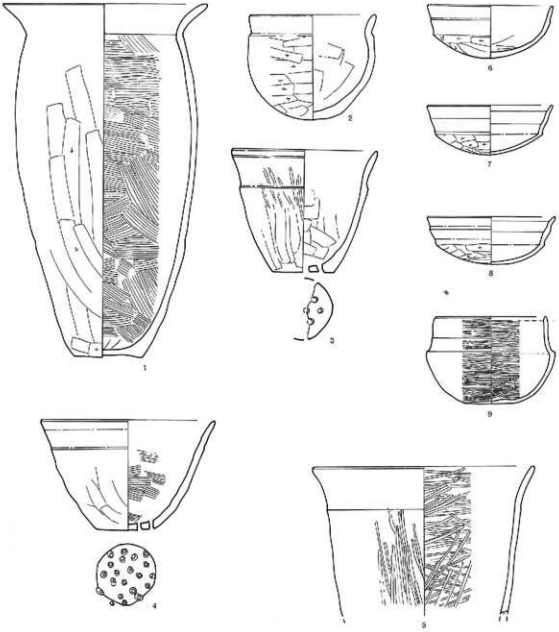
7　第６号竪穴住居址（Ｈ６号）



第12図　第６号住居址実測図（１：80、カマド土層断面図は１：40）

第６号住居址は、調査南区北端で検出された。検出された東西長は432cm、南北長は445cm、深さは38～49cmを測る。覆土は３層に分割された。第１層はロームとパミスを少量含む黒褐色土、第２層はローム・パミス小粒以下・炭化材微小片を微量含む黒色土、第3層はロームを多量に含む暗褐色土である。貼り床は認められなかった。

ピットは主柱穴と考えられるものを１基確認した。またカマドの右脇より貯蔵穴と推定されるピットを検出した。カマドは崩壊した状態で、北壁中央部で確認された。粘土と溶結凝灰岩を主体として構築されていたものと推定される。カマドの覆土は10層が確認された。図中第４層は焼土粒子・粘土粒子を微量も黒褐色土、第５層は粘土粒子を多量、焼土粒子を微量含む暗褐色土、第６層は粘土粒子を多量に、焼土粒子を微量含む灰黄褐色土、第７層は粘土ブロック主体の灰褐色土、第８層は粘土粒子と焼土粒子を多量に含む黄褐色土、第９層は焼土主体の明赤褐色土、第10層は灰主体で、焼土を多量に、炭化材微小片を微量含む橙色土、第11層は構築層で、ロームを多量に含む極暗赤褐色土、第12層は構築層で、粘土主体のにぶい赤褐色土、第13層は構築層で、粘土主体で、ロームを少量、炭化材微小片を微量含むにぶい赤褐色土であった。

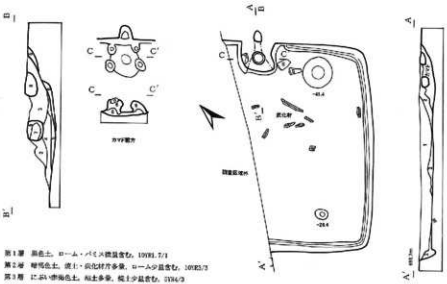


第13図　第６号住居址出土遺物実測図（１：４）

遺物は甕、甑、坏などが出土した。１は長胴甕で、胴部の外面がヘラケズリ、内面はハケ目調整される。口縁部は内外面ともにヨコナデである。また底部に木葉痕が認められた。２は小型甕で、胴部外面がヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。口縁部は内外面ともにヨコナデである。３・４・５は甑である。３は胴部外面がヘラナデ後にヘラミガキ、内面はヘラナデが施される。４は胴部の外面がヘラナデ、内面はハケ目調整がなされる、３・４ともに底部に棒状用具による刺突で孔が設けられている。５は胴部内外面ともにヘラミガキがほどこされる。底部の孔は不明である。６から８坏で、口辺部は内外面ともにヨコナデ、体部と底部は外面がヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。９は坏で、内外面ともにヘラミガキが施される。

本住居址の所産期は、古墳時代６世紀後半から７世紀前半と推定される。

8　第７号竪穴住居址（Ｈ７号）



第１層　黒色土、ローム・パミス微量含む。10YR1.7/1
第２層　暗褐色土、炭土・炭化材片多量、ローム少量含む。10YR3/3
第３層　にぶい赤褐色土、粘土多量、炭土少量含む。7.5YR4/3
第４層　暗赤褐色土、粘土多量・炭土少量含む。7.5YR3/6
第５層　褐灰色土、炭土極、8YR5/1
第６層　暗灰色土、粘土主体、7.5YR4/1
第７層　明褐色土、粘土主体、7.5YR5/6
第８層　黒褐色土、ロームブロック・粘土ブロック混合、10YR3/2

第14図　第７号住居址実測図（１：80、カマド土層断面図は１：40）

第７号住居址は、調査北区北端で検出された。検出された東西長は301cm、南北長は441cm、深さは25～45cmを測る。覆土は２層に分割された。第１層はロームとパミスを微量含む黒色土、第２層は焼土粒子、炭化材小片を多量、ロームを少量含む暗褐色土である。貼り床は認められなかった。床面直上の中央部付近を中心に炭化材が検出された。床面はかなり激しく熱を受けていることから、本住居址は、焼失した住居あるいは意図的な焼却が行われた住居と考えられる。

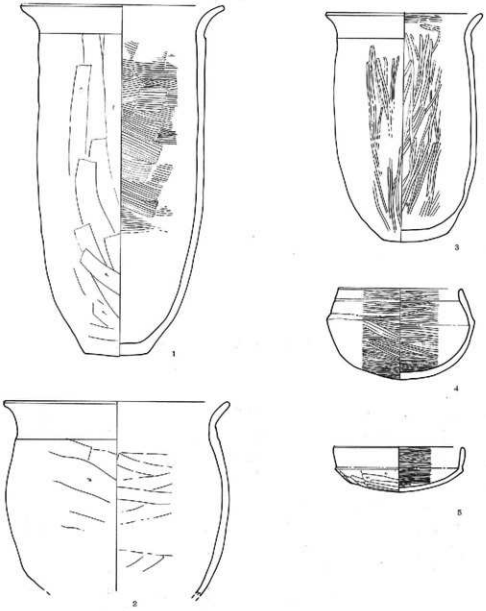
ピットは主柱穴と考えられるものを１基確認した。またカマドの右脇より貯蔵穴と推定されるピットを検出した。検出した北側・東側・南側の壁直下で周溝を確認した。

カマドはほぼ完全な形を北壁中央部で残していた。煙道天井部・焚口天井部ともに良好な状態で残存していた。特にかけ穴と火焚口付近は損壊が認められず、使用時の状態を保持していると考えられる。住居址覆土第2層が全体を覆っており、焼失・焼却後時間を置かずに埋没したものと推定される。カマドは粘土を主体とし、左袖の上部に溶結凝灰岩を使用している。カマドの覆土は６層が確認された。図中第3層は粘土粒子を多量に、焼土粒子を少量含むにぶい赤褐色土で、第４層は焼土を多量に、粘土粒子を少量含む暗赤褐色土、第５層は灰主体の褐灰色土、第６層は粘土主体の褐灰色土、第７層は粘土主体の明褐色土、第８層はロームブロックと粘土ブロックの混合土で黒褐色土であった。

遺物は甕、坏などが出土した。１は長胴甕で、胴部の外面がヘラケズリ、内面はハケ目調整される。口縁部は内外面ともにヨコナデである。２は広口甕で、胴部外面がヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。口縁部は内外面ともにヨコナデである。３は小型甕で、内外面ともにヘラミガキが施される。口縁部外面はヨコナデがなされる。４・５は坏である。４は内外面の全体にヘラミガキが施される。５は口縁部外面がヨコナデ、体部から底部はヘラケズリが施される。内面はヘラミガキが施される。口縁部と体部には明瞭な稜が見受けられ、また口縁部が直立していることから、後期でも古い様相が

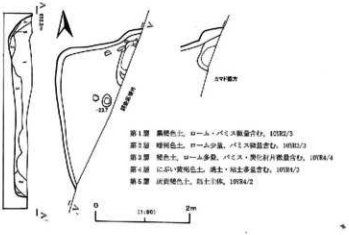
うかがえる。

本住居址の所産期は、古墳時代６世紀前半と推定される。



第15図　第７号住居址出土遺物実測図（１：４）

9　第８号竪穴住居址（Ｈ８号）



第16図　第８号住居址実測図（１：80）

第８号住居址は、調査南区中央東端で検出された。検出された東西長は163cm、南北長は294cm、深さは26～42cmを測る。覆土は３層に分割された。第１層はロームとパミスを微量含む黒褐色土、第２層はロームを少量、パミスを微量含む暗褐色土、第３層はロームを多量に、パミスと炭化材微小片を微量含む褐色土である。貼り床は認められなかった。

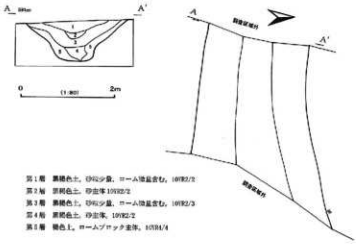
ピットは主柱穴と考えられるものを１基確認した。

カマドは完全に崩壊した状態で検出した。北壁中央にあるものと推定される。カマドの覆土は２層が確認された。図中第４層は粘土粒子と焼土粒子を多量に含むにぶい黄褐色土で、第５層は粘土主体の灰黄褐色土である。第５層は構築層と考えられる。

遺物は、図示を控えたが、カマドを中心に、甕、坏などが出土した。

本住居址の所産期は、平安時代９世紀後半から10世紀と推定される。

10　第１号溝状遺構（Ｍ１号）

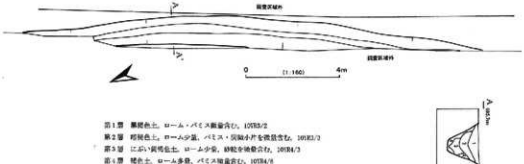


第17図　第１号溝状遺構実測図（１：80）

第１号溝状遺構は、調査南区の南端で検出された。西より東に向かって標高を下げる。

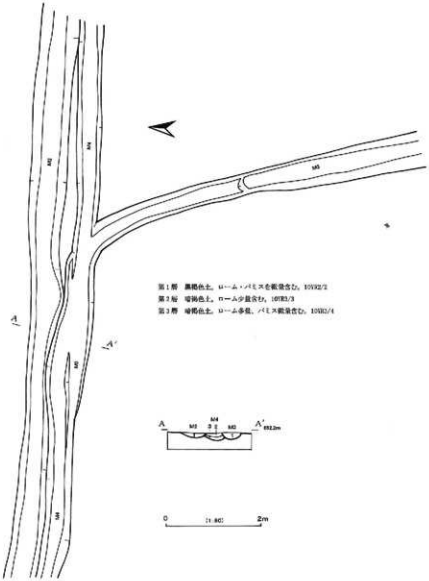
覆土は５層に分割された。第１層は砂粒を少量、ロームを微量含む黒褐色土で、第２層は砂主体の黒褐色土、第３層は砂粒を少量、ロームを微量含む黒褐色土、第４層は砂主体の黒褐色土、第５層はロームブロック主体の褐色土である。断面形態は台形で、底部はフラットである。

遺物は、古墳時代後期～平安時代までの甕や坏で、所産期は不明である。



第18図　第５号溝状遺構実測図（１：160）

11　第２号・第３号・第４号溝状遺構（M2～M4号）



第19図　第２号・第３号・第４号溝状遺構実測図（１：80）

第２号・第３号・第４号溝状遺構は、調査南区中央で検出された。第２号と第３号溝状遺構は、第４号溝状遺構を破壊する。第２号と第４号溝状遺構は、西より東に向かって標高を下げる。第３号溝状遺構は、西より南に向かって標高を下げる。断面は「U」字を呈する。水が流れた形跡は認められない。

覆土は３層に分割された。第１層はロームとパミスを微量含む黒褐色土で、第２層はロームを少量含む暗褐色土、第３層はロームを多量に、パミスを微量含む暗褐色土である。

遺物は、古墳時代後期から平安時代にかけての甕・坏の破片が出土している。

所産期は不明である。

12　第５号溝状遺構（M5号）

第５号溝状遺構は、調査北区の南側で検出された。断面形態は台形を呈し、底面はフラットである。北より南に向かって標高を下げるが、ほとんど標高差はない。

覆土は４層に分割された。第１層はロームとパミスを微量含む黒褐色土で、第２層はロームを少量、パミスと炭化材微小片を微量含む暗褐色土、第３層はロームを少量、砂粒を微量含むにぶい黄褐色土、第４層はロームを多量、パミスを微量含む褐色土である。

遺物は、古墳時代後期から平安時代にかけての甕・坏の破片が出土している。

所産期は不明である。

馬瀬口遺跡近景（北より）

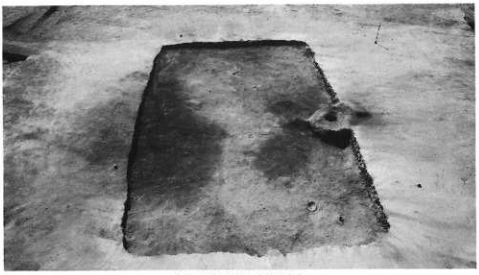
馬瀬口遺跡近景（北より）

第１号住居址（北より）

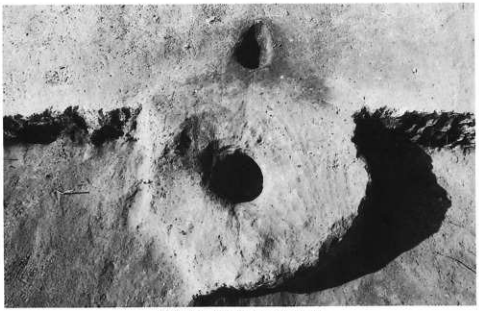
第２号住居址（西より）

第２号住居址カマド（南より）

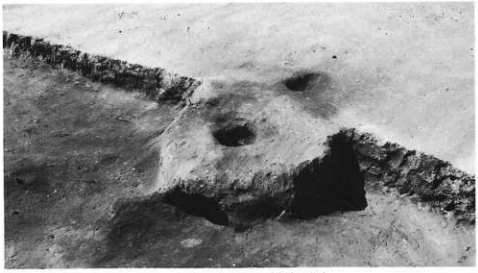
第２号住居址カマド掘り方（南より）



第３号住居址（東より）



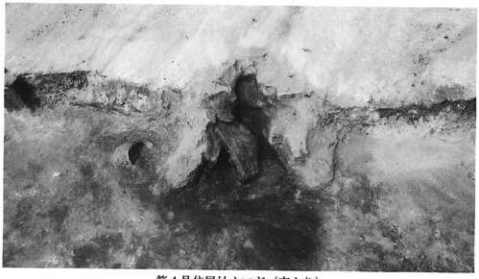
第３号住居址カマド（南より）



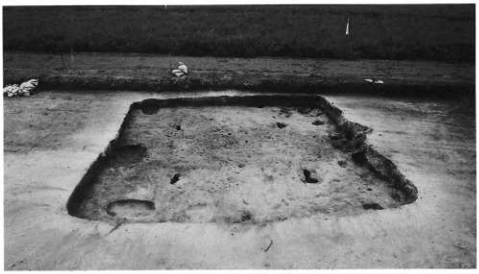
第３号住居址カマド（南東より）

第3号住居址カマド掘り方（南より）

第4号住居址（東より）



第4号住居址カマド（南より）



第４号住居址掘り方（東より）

第４号住居址カマド掘り方（南より）

第５号住居址（南より）

第5号住居址カマド（南より）

第5号住居址カマド掘り方（南より）

第6号住居址（南より）

第6号住居址カマド（南より）

第6号住居址カマド掘り方（南より）

第7号住居址（南より）

第７号住居址（南方より）

第７号住居址カマド（南より）

第７号住居址カマド掘り方（南より）

第８号住居址（南より）

第８号住居址カマド（南方より）

第１号溝状遺構（北方より）

第5号溝状遺構（北より）

H1 4-1

H1 4-2

H2 4-3

H2 4-4

H2 7-1

H2 7-2

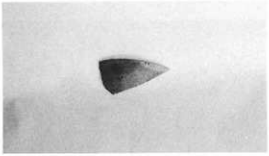
H3 7-4

H3 7-5

H3 7-6

H3 7-7

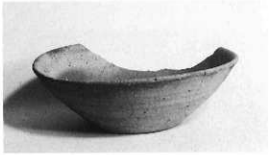
H4 9-4



H4 9-5

H4 9-6

H4 9-7



H4 9-8

H4 9-9

H4 9-10

H4 9-11

H4 9-12

H4 9-13

H4 9-14

H4 9-15

H5 11-4

H5 11-5

H5 11-6

H5 11-1

H5 11-3

H5 11-7

H6 13-1

H7 15-1

H6 13-7

H6 13-8

H6 13-2

H6 13-4

H7 15-3

H7 15-4

H7 15-2

H6 13-9

H6 13-6

H7 15-5

第28回 少年考古学教室スナップ

第28回 少年考古学教室スナップ

報告書抄録

書名	馬瀬口遺跡
ふりがな	ませぐちいせき
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第182集
編著者名	羽毛田卓也
編集・発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	2010.3.31
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市志賀5953（ながのけんさくししが）
遺跡名	馬瀬口遺跡
遺跡所在地	長野県佐久市瀬戸86-1他
遺跡番号	佐久市—250
経度	北緯36°15′07″
緯度	東経138°29′23″
調査期間	2007.7.24～2010.3.29
調査面積	1900㎡
調査原因	道路改良
種別	集落址
主な時代	古墳時代・奈良時代・平安時代
遺跡概要	遺構　竪穴住居址８軒 　　溝状遺構５条 遺物　古墳~奈良平安時代の土器石器
特記事項	

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第182集

馬瀬口遺跡

2010年３月

編集・発行　長野県佐久市教育委員会
長野県佐久市大字中込3056番地
文化財課
長野県佐久市大字志賀5953番地
電話　0267-68-7321

印刷所　有限会社ヴィアン